

畑作技術情報

発行 令和8年4月1日

第 2 号

たいせつ農業協同組合

営農部 農産販売課

上川農業改良普及センター

本所 営農センター 57-2357

支所 営農センター 87-4111

～起生期の茎数が少ない圃場が見受けられます。～

圃場をよく見て融雪後追肥をしましょう！～

昨年の秋まき小麦の播種は、降雨の影響もあり全般的に遅れておりました。このため、十分に葉数が出現せず、茎数も少ない圃場が見受けられます。こうした圃場では、融雪後速やかに追肥を実施する必要があります。

適期に播種できた圃場では、生育を確認し、幼穂形成期型（以下、幼形期型）とし、起生期追肥は行わず、1回目の追肥は幼穂形成期から開始しましょう。これにより茎数の過多を回避し、最終穂数を600本/m²程度に抑えることができます。その結果、過繁茂による倒伏や細麦を防ぎ、止葉を立たせるとともに、株本まで光が届く受光態勢を整え、生産性の向上を図りましょう。

1. 「きたほなみ」

起生期の茎数を調べ、茎数が多い場合(1,000本/m²以上)は、起生期追肥を省略した幼形期型追肥を行い茎数コントロールを行いましょ。

起生期茎数が1,000本/m²未満の場合は、起生期からの追肥を行い茎数を確保しましょ。

表1 「きたほなみ」の起生期茎数と追肥窒素施用量(kg/10a)

時期（平年値） 起生期茎数	起生期 (4/4)	幼形期 (5/2)	止葉期 (5/22)
1,000本/m ² 以上	—	6	4
1,000本/m ² 未満	4	4～6	4

備考 上記施肥量は基準量であり、ほ場条件（CEC、腐植、堆肥施用、硝酸態窒素量など）、生産力（収量）に応じ増減します。

◎幼形期型追肥の施肥事例 窒素(kg/10a)

(起生期 1,000本以上、幼穂形成期 5月2日の場合)

施肥時期	1回目 4/26 (幼形期少し前)	2回目 5/13	3回目 6/1
窒素施肥量	6kg	4kg	0～4kg ※

備考 幼形期型追肥は、1回目の追肥は幼形期の1週間程度前とし、前回の追肥から2週間程度間隔を空けて2回目の追肥、3回目の追肥を行いましょ。

※ 3回目の追肥は、倒伏の危険があるので茎数、葉色を見ながら加減しましょ。
(出穂期の茎数が多く、止葉直下葉の葉色が濃緑～暗緑色(SPAD50以上)では追肥をしないでください。)

農作業事故には十分注意しましょ！

